

広島俳句倶楽部

令和三年八月作品集

北海道の思い出 松田裕子

三姉妹で北海道を旅した時の思い出を句にししました。当時は、みな五十代。まだまだ元気で、三人で交代しながらレンタカーを運転し、北海道の広い大地と壮大な景色に魅了された四日間でした。しかし、その一年後、妹は亡くなりました。あの時の妹の楽しそうな笑顔は、今もはきりと脳裏に焼き付いています。

夏霧の空港に立つ三姉妹

夏曉の北海道の大地踏む

峰雲に向かつて走るレンタカー

額寄せ夏野に開く旅の本

知床のお花畑を右に見る

夏の野にあまたの蝶の飛び交ひて

馬鈴薯の花一面に驟雨かな

夏霧の途切れて蒼き十勝岳

湯けむりに北狐見る夏の宿

いもうとの寝息間近に夏の月

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

空港に降り立つことから旅は始まり、大地に広がる夏野、お花畑、山、そして北狐と、北海道の大自然の様子がよく伝わってきます。

亡くなられた妹さんとの楽しい思い出、どの一瞬も忘れず心の中の妹さんと一緒に生きてこられ、今、この十句に甦りました。

夏曉の北海道の大地踏む

夏の夜明け、大地に一步を踏み出す。この句は「夏曉」の季語によって北海道の大地の広がりや力強く表し、これから始まる旅への期待を感じさせます。

額寄せ夏野に開く旅の本

夏野に来て、次はどこへ行こうかと本を開く。さぞかし三人で笑ったのでしょうか。「額寄せ」に子どものように仲の良い姉妹の姿が浮かんできます。

いもうとの寝息間近に夏の月

その頃妹さんは病をお持ちだったのか、その健やかな寝息を間近に聞きながら遠くの「夏の月」を見る。作者の気持ちに引き寄せられました。

十三回忌

森口良樹

母が亡くなってから、今年の四月で十三回忌を迎えた。コロナ禍の中、法要を行うかどうか苦慮してやつと日時を決めたところで、兄がコロナに感染し、急遽、日時を変更することになった。幸い兄も軽症で退院することができ、平常な生活を取り戻したが、このようなことがあつて、自分勝手に仏壇に家族の安寧をお願いしていることに気づいた。またる盆には、先祖の霊に感謝と礼を尽くしたい。

ぐい呑みを墓前に買うて草の市

朝市に探して回る蓮の花

小流れに野菜を洗ひ魂迎

父とまた海見たくなり墓参り

新しき簪片手の墓参り

墓越しにだれか会釈す墓掃除

墓に羽休めて去りぬ赤とんぼ

一波を待ちて流せる絵灯籠

手は父似腰は母似の踊かな

星月夜母の浴衣に手を通す

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

お母様の法要を準備する作者の気持ちや振る舞いに、親子の繋がり、尊さ、不思議さを感じました。私も両親を思い出して、深く感じながら読ませていただきました。

また、人が伝え行ってきた盂蘭盆会に関わる季語の本当の趣を教えていただきました。心から感謝しています。

朝市に探して回る蓮の花

売っていたとしても数少ない蓮の花、一生懸命に探す姿が目に見え、心を通わせて法要の準備をしているのです。

父とまた海見たくなり墓参り

海の見えるお墓にお父様もいらっしやるのでしょうか。昔のよう、またここから一緒に海を見たいと思って墓参りに行くのです。

星月夜母の浴衣に手を通す

亡くなった母の浴衣に手を通してみる、そこには居ない母を感じたい気持ちがよく詠まれています。

季語「星月夜」が、母への思いと時の流れを感じさせてくれます。

梅雨の川上ミの村より人の来る

山に入り山より戻り梅雨の晴

梅雨明けし日の本堂に参りたる

白蓮に止む気配なき今日の雨

その家の麦稈帽子見てとほる

海へ飛び山へ飛びけり夏つばめ

大夏木鴉が出たり入つたり

蟬の声止めば雑事を思ふたり

青鷺の我を嫌うて飛び立てり

この町に早も木槿の咲きにけり

城壕のほとり初蟬鳴き始む

昼顔に明け方の雲晴れにけり

電波塔並ぶ海岸夏の雲

熱帯夜月の残れるままに明け

目が覚めて麦茶一杯飲み干せり

道端に掃かれてゐる蟬の殻

よく風の通る屋敷の木槿かな

緑蔭にバイオリン弾く昼下り

片蔭に絵本読みつゝ母を待つ

花ごとに雨しずくして水引草

梔子の花の夜風に香りたる

初蟬を櫟の枝に聞きにけり

枇杷の実に昼から雨となりけり

梅雨晴の日本海から風の吹く

築を越す水のはげしく湖に入る

みづうみに大きく浮かび夏至の雲

夜明からすこしして蟬鳴きだせり

夏潮のしづかに上る汽水川

自転車漕いで見にゆく大夕焼

夏の朝雀の声に目覚めけり

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

ゑのころに雀の降りて実を食めり

朝顔の一輪咲いて安堵せし

弟の新盆迎ふ多雨の中

棚経に小学生の聞き入りて

墓掃除家族揃うて出掛けたり

初秋の川に白鷺群れてをり

朝まだき汽水に映る秋の雲

秋暁の風受け土手を歩きけり

手を伸ばし一つ腕ぎたる青藜

門柱に雀囀る秋の朝

日焼け止塗られ幼子砂遊び

夏草を焼きたる煙流れくる

あれこれと母したやうに盆用意

夜に入りて雨音のする盃蘭盆会

朝の風かすかに早稲の匂ひけり

つくつくし裏から入る山の寺

夕暮の落ちし木槿を掃きにけり

水張りし盥の縁に蜻蛉くる

露草を一輪挿せる朝餉かな

あかときの毘にかかりし猪を見る

西日差す間口の狭き古本屋

ぐるぐると坂道上り夏野かな

百日紅ひとかたまりの影揺れて

研ぎ水を花壇へ注ぐ夏の夕

髪を切る鉄の音や夕涼し

診察を待つ母の見る熱帯魚

甲虫足折りたたみ死ににけり

文番の屋根塗り替ふる日の盛り

窓覆ふ胡瓜に花の二つ三つ

緑蔭に自転車並ぶ児童館

秋沙

あざみ

亜矢

天守へと青葉の下を抜けてゆく

本丸の跡の石垣苔青し

ふり返り青葉の山の城遠く

城山の向うから止む夏の雨

滝の音遠くとなれる峡の川

みんなの混ざりて樟の蟬時雨

夕立の橋を濡らして止みにけり

犬連れとよく行き合へる夏の夕

遠山にたちまち立てる雲の峰

糠雨や螢袋に霽して

棒櫓の空蟬にさす朝日かな

帰省子をいつもの橋に待ちゐたり

閼伽桶に花を浸して墓掃除

川岸の草に止まりて糸蜻蛉

突堤にあきつの群れて雨上り

雨の夜の宮居に鹿の寄り来たり

虫の声テールランプの遠ざかる

蛸に覚めてまた読む放浪記

稲の穂のきらきらとして日照り雨

稲の穂に風吹いている夕まぐれ

雪二間積もつてゐたる酸ヶ湯かな

五月雨に山の祠の濡れにけり

夏山を遙かより見て描くなり

氷菓子舐めて待ちゐる駐車場

水遣れば凌霄の花手にふれて

浜風に揺れては戻り罌粟坊主

岩木山夏の潮に映りをり

浮輪手に蔭を選んで帰りたる

涼風の吹き来る浜の駅に立つ

喧騒を背にして帰る祭の夜

井藤希

暁子

新庄憲彦

蟬はいま羽化して羽の透きとほり

吾がために夫は茄子を焼きくれし

ほととぎす雨が上がればすぐに鳴き

滝の音聞こゆる道の先に村

蜻蛉来てすぐに垣根に止まりけり

蜻蛉の止まりて揺るる草の光

ふるさとに我が植ゑたる白木槿

山風にわづかに戦ぐ稲穂かな

螳螂を手に遊ぶ子を見てゐたり

秋涼し激しき雨の遠のいて

すみれ

海までの道を下りて野分晴

稲刈を終へし母より長電話

川までの道に揺れをる猫じやらし

川に足つけをれば来る蜻蛉かな

山あいの道譲り合ふ墓参

鬼灯をはぐしてをりぬ母の家

行く道の風に吹かるる秋津かな

また同じとんぼう止まる池の端

それぞれが膳を持ち寄り地藏盆

傘さして朝顔を見る日曜日

知佳子

母が家の三和土で作る柏餅

干梅を甕に敷き詰む母のごと

長雨のあと裏山に蟬の鳴く

初盆の姉の写真を母と見る

雨止みて家族揃ひて墓参り

母屋から秋の出水を見てゐたり

秋出水母と一緒に避難せり

一晚中川音高し秋出水

霧深き故郷にいま帰りけり

バス停の傍に芙蓉の花揺るる

ちどり

薔薇切つて昨日の雨のこぼれけり

嘶家のはらりと脱ぎて夏羽織

新涼や背筋を伸ばし文字を書く

烟を聞きつつ夕餉仕度せり

崩れたる土塀に葛の絡みをり

草むらがあれば飛びけり秋苗

母の皿さんまの骨の美しき

卵焼き兄と取り合ひ秋の空

稲の穂を握り重さを確かむる

刈り入れのまぢかな稲に雨づく

水中花辿れば海に続いてく

どちらかの二つの扉冷蔵庫

英会話広告剥げた梅酒かな

バス停の異空間なる極暑かな

香水の女夜だけ雨が降る

七夕紙世界にいいことばかりあり

警笛の向こうどこかの霊迎

墓参り知らない人の置いた酒

あくび呑む線香花火気まぐれに

堤防の朝顔にだけ同じ朝

この路地に夾竹桃の咲きにけり

どくだみの母の生家に群れ咲いて

ほうたるは乾いた草の香を放つ

由布岳のくろぐろとして螢の夜

両脇に父母のゐる蚊帳の夜

蚊帳越しの月を見ながら眠りけり

向日葵の向うを子らの駆けてくる

登校の子の向日葵にふれて行く

玫瑰は汀へ到る道に咲き

夕風や一縷に雲ひろがりて

友岡崇山子

ふじ女

松田裕子

山法師目指して上る友の家

向日葵の朝日に向かひ並びたる

青田風一気に背戸へ吹き抜ける

石垣を這ひ出る蛇の長きこと

橋渡る子に夏雲の流れけり

幼子の飛ばして遊ぶ夏帽子

夏風に向かひ自転車漕いでゆく

夏の午後浜へ自転車続きをり

百日紅掃きゆく方へ日の沈む

白木槿雨に打たれて咲いてをり

美耶

朝市の中に初蟬聞きにけり

蟬が鳴くラジオ体操終はる頃

いつの間に葎となれる生家かな

抽斗に備りた本あり星の恋

星祭交換日記子は始め

日焼して紫山子を一つ抜きにけり

父が呼び母が呼びたる花野かな

夕暮の背戸から吹いて処暑の風

秋風や橋に列車を見送つて

月影を映してゐたる潦

森口良樹

菩提寺の樟の落葉を掃きをりぬ

幼子の見上げてゐたる滝しづき

蜻蛉の慰霊の池に尾を打てり

久々の生家の跡や甕熟れ

朝の畑かじる西瓜の美味きこと

ベランダの鉢に秋茄子揺れてをり

ベランダに次々と櫛ぐ秋茄子

童心にもどり鬼灯鳴らしけり

老いてまた能登路楽しむ稲の花

阿姫

雷鳴や十四の子ふと居間に居り

我よりも人待ち顔よ向日葵は

向日葵を貰ひし家路旗手のごと

花火持ち公園駆ける幼子よ

ふと会話途切れてよりの蟬時雨

筆談で丹念に診る暑氣中り

甘酒は水菓子とは患者に勧め

花莫産を孫ら取り合ふ里帰り

瓢箪を祖父はおどけて吹いて見せ

綾乃

夏の朝せせらぎに目を覚ましけり

川の宿夏鶯の聞こえる

笹原の峰の向うに雲の峰

自転車で若き人行く夏の橋

百日紅そば降る雨に咲き満ちて

浜木綿の土佐の海辺に群れ咲ける

夕焼の峠を越えて里に着く

新涼の石鎚山の裾野ゆく

橋渡りまつすぐ続く月の道

大畑恵

ふる里の田を覆ひたる蓮華草

夏の草百坪の畑覆ひけり

病葉の青さを残し川に散る

二三十魚籠の鱧見す子どもかな

鱧を焼く匂ひ漂ふ台所

野良仕事終へて涼風吹きにけり

夕餉にと妻は小鰯を捌きをり

宙に浮きまたすぐ飛んで赤蜻蛉

漁釣の少年の影消えにけり

英一

絹莢の筋取りをれば時の経ち

庭に咲く矢車草を活けにけり

青蛙追へば景蔭に飛び込んで

昼食の素麺冷やすガラス鉢

日焼止め二度目を塗つてバスを待つ

海までの炎天の道歩きけり

端居する父は鳥籠直しをり

一匙のことさら美味きメロンなり

闇の中二人で見入る夜光虫

宮田保江

早曉の裏山に捕る兜虫

花蔭に父は新聞読んでをり

草取を母に代りて済ませたり

夏菊の同じ高さに咲き揃ふ

炎昼の踏切わたりパンを買ふ

肩で息整へてゐる極暑かな

緑蔭の石に腰掛け休みたる

抽斗の底まごまごときらら虫

網戸から峡の風入れ祖母の家

山野ウタ

夾竹桃夜風にゆらりゆらり散り

夏雲へ向かつて走る電車かな

けふの蓮ひときは高く咲きにけり

畑からもどりて使ふ日向水

蓮の景を打つ音のして夕立くる

長雨に母好物の小豆煮る

風吹いて蓮の実が景にふれにけり

集落に山の迫りて盆の月

桑門わかこ

蓮池の奥になだらか安芸の山
西からの風に二度寝の夏の果
頬杖で雲を見てゐる今朝の秋
休診の札吊るす戸に蔦の這ふ
露けさの垣根を過ぎて帰宅する
秋の色激しき雨の夜の明けて
川からの風に揺れるる芒かな

大橋博子

梅を干す頃合は青空を見て
一人する草取仕事無心なり
透明な暑さよ窓も光りをり
驟雨来て夏の地面が息を吐く
夕立の霏つらなる電線や
夫と来て花野歩いた日の遠く

紀英子

かなかなを聞いて厨に入りけり
串焼の魚にしぼる青蜜柑
朝夕に歩く畦道稲の花
選句する座に聞こえる虫の声

熊谷ゆり子

路地を出てばつと広がる青田かな

ふるさとの白桃すつと剥けにけり

雨上り白き芙蓉の揺れてをり

秋雨の朝のアラーム鳴りにけり

やす保

二十四時間テレビはつくり初秋かな

聞いたことが無いかなかなの鳴き声を

趣味のない父が愛した蝨蠨

阿波久

山雀のえこの実を取り飛び立ちぬ

桃を剥く手に残る香の甘きこと

新涼や飼ひるる鳥に声をかけ

上島康子

青田波新幹線の窓に見て

三つ編みの少女来てる蓮の花

烟や一夜泊りの里帰り

高嶋頌代

大夕立足跡づく廊下かな

呉港の煉瓦の道の墓参かな

八月やへりコプターの音頻り

ちかこ

雨音の止みて聞こゆる秋の蟬

八月の雨いく日も降り止まず

通り抜けできぬ道あり稲の花

撫子

烟のとまるリュックを担ぎたる

山の水たづり汲んで墓洗ふ

大粒の雨に倒れし稲穂かな

穂高

梅雨末期水しづき立て車来る

涼新た団地の居間を風が抜け

ランニングする人と会ふ秋涼し

みさ子

新涼やケーブルカーで向かふ山

新涼の川がうがうと鳴りにけり

新涼の握りて渡るかざら橋

山崎桂子

網戸して星空近くなりにつけり

稲の田は今は宅地になりにつけり

津田玲子

令和三年七月度作品集より

美耶 私の選んだ十句

いま過ぎし石榴の花のこと思ふ	佐保光俊
夕焼を正面に見て帰りけり	高尾ひとみ
月下美人固唾を呑んで開花待つ	秋沙
目玉焼黄身のとりりと夏の朝	亜矢
笹百合の香りの届く木蔭かな	すみれ
一叢の紫蘇を残して草を取る	ちどり
床に臥す母に初枇杷剥きにけり	松田裕子
着いてすぐ帰省子に聞く滞在日	森口良樹
どれもみな一夜に開き百合の花	桑門わかこ
トマトへと太き添木の立ててあり	宮田保江

秋沙 私の選んだ十句

きさきげの花散りつづく梅雨さなか	佐保光俊
遊ぶ子の上に泰山木の花	高尾ひとみ
紫陽花の車窓に続く旅路かな	すみれ
金雀枝の風に吹かれて日の暮るる	美耶
行く船の舳先に碎け夏の潮	大畑恵
雷鳴の遠く聞こゆる家路かな	民
夕焼の大樹に鳥の集まりぬ	ちかこ
釣竿を振り込む音や雲の峰	穂高
夏つばめ水路に沿うて飛び交ひぬ	やす保
待ち合はすビルの向うの夏の雲	山崎桂子